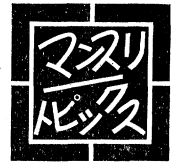


1. 流砂地震と新技術
2. 「日本の理想」から
3. アメリカの土木賞
4. 被災地のできごと



1. 新しいものに被災が目立つという「人間が犬にかみついた」的現象がおおまかに向きだったため、実勢以上にはでな扱いをジャーナリズムからちょうだいしたことも新潟地震の一つの特長であった。反省すべき点はもちろん十分反省するとして、こんなことから土木技術者が必要以上に憶病になることは新たな人災として警戒されるべきであろう。橋梁上部構造と下部構造を粘性的に結合することによる落橋現象の阻止、流砂現象消失のために必要なバインダーの限界量探求、傾斜した建物を直す手段としての流砂現象利用の可能性、個々の施設に対する適正な選択的耐震度設定の重要性、地震でやられなくても貯油の少ないとき台風でやられたろうと言われる石油タンクのような直訳技術反省……と多くの問題が提供されたことに土木技術者は新技術開拓への意欲を起すべきであろう。 [J]

2. 「青山さんを初めて識ったのは、大正 2, 3 年の交、私のまだ大学生時代で、彼がパナマ運河工事から帰国された頃であったであろうか。……それから約 50 年、彼にはいつも若々しい精神——永遠の青年を想わしめるものがあった。……青山さんは、齢をとっても、常に未来を夢見、前方を望んで働かれ、めったに過去を語らず、ことに自分自身について話したことがない。……青山さんは内務省土木技師として「荒川放水路工事」と「信濃川分水工事」の二大事業の主任として大きな功績を残されたが、その名を知る人は関係者以外には殆んどなかったといってよい。……広く知られていないということと、その人の偉大さとは何の関係もないことである」。

『此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠牲ト勞トヲ払ヒタル我等ノ仲間ヲ記憶セン為ニ』荒川放水路の碑文には、青山技師の名はどこにも見出せない。そこに青山士という人の謙讓と、労苦を偕にした仲間の者に対するいたわりと愛情がにじみ出ている。「青山士はその字の示すごとく、実に士らしいキリスト者であった。彼は祖国日本とその伝統を愛した。と同時に、いなそれ以上に、人類と正義を愛した。信濃川記念碑の裏面には『人類の為メ國ノ為メ』と彼は誌した。日本の河川工事を竣工する場合にも、それが人類の幸福と世界の平和につながるものであらんことを彼は絶えず願ったのであった」(南原 繁著「日本の理想」p. 288~295 “ある土木技師の生涯”より、岩波書店、昭和 39 年 4 月)。

遠くなったといわれる明治時代に活躍したり、育った人々のなかには、青山さんのような背骨のある先輩が多勢いた。これらの先輩たちが、世界に負をとらぬ日本の土木技術の基礎を築いたといえる。同じく背骨のある前東大総長南原繁氏は、青山さんの追悼式においてこのようにその生涯を偲んでいる。 [S]

3. ASCE (正式に訳すとアメリカ土木技術者協会となる) では 1963 年の作品に対する土木賞受賞者を発表した。それによると項目は全部で 14、受賞者総数は 19 名におよび、それぞれの賞に Norman 賞、Collingwood 賞といった個人名が冠せられていて、この点本学会の「吉田賞」のような形である。

「基礎粘土の間隙水圧」、「リオ・デ・ジャネイロ港の石油基地」、「曲げに対する溶接筋の強度」などのように、研究論文あるいは工事報告を対象としたのが普通だが、「水力発電技術の進歩に貢献し」たり、「弾性理論、プレートとシェル理論の展開、ならびにその分野の多数の有益な論文を発表し」たことに對する賞もふくまれているのが眼に付いた (Civil Engineering, 64 年 6 月号による)。

わが国土水界の発展を考えると本学会の授賞の行ない方はさらに改良の余地があるかも知れない。 [C]



4. とき、8 月は第 2 回国際水質汚濁研究会議の東京開催、楽しい海水浴、今やまん性となった東京の水不足問題など水に関する話題はつきないようだ。昭和 39 年 6 月 16 日と言えば新潟地震発生の日、伝えられるニュースの中に水を求める市民の声が切実なひびきをもっていたことをご記憶の人もおられよう。現地の飲料水不足は目を覆うものがあり、水を求めて市民は血まなこであった。この中で幸いにして飲むに耐える井戸を持ったある家でははり紙をし、道ゆく人に尊いであろう飲料水を分ち与えていたのが目をついた。心あたたまること行ないの中に学ぶべき多くのものを感じた次第である。 [E]